

<調査研究シリーズ 109>

「多国家市民」としての高麗人研究 — 「多共和国ソビエト連邦人民」からの変遷

申 明 直¹⁾

1. はじめに

高麗人は18世紀末から19世紀初めにかけてロシアの沿海州に移住し、ソビエト連邦時代にはスターリンによって再び中央アジアへ強制移住させられた後、最近はまだロシアの沿海州あるいは韓国への移住を続けている。波乱万丈な移住の歴史に終止符を打ち、疲れた生を祖国の韓国に留めることが出来るようにするための努力が続いている。特にロシア移住150周年を迎えた今年、このような論議はより強力に推進されている。

韓国政府は、以前から「在外同胞法」を通して、中国朝鮮族をはじめロシアを含む高麗人の韓国入国を許容し、一般外国人を対象にしている「雇用許可制」より相対的に良い条件の労働権を付与する「訪問就業制」を実施している。しかしまだ色々足りない部分が多く、高麗人の韓国移住と定住がよりスムーズになされるためには、より充実した諸市民権の付与が切実である。しかし、一部からは高麗人に成員権の付与を越え、韓国への同化を企画すべきだという主張もあるが、高麗人の韓国同化への企画は果たして妥当なのか。これを究明するためにはまず高麗人にとって韓国はどのようなものなのかを探ってみなければならない。

高麗人には三つの祖国があるといえよう。祖父が暮らしていた沿海州あるいはソ連が一番目の祖国だとすると、家族たちが暮らしている中央アジアはその二番目の祖国であろうし、高麗人の一部が居住している韓国は三番目、即ち歴史の中の祖国である。一点に拠点を置きながら、遠いところまで農業の仕事をするため旅立っていた高麗人の今までの生活パターンから見ると、韓国での生もやはり遊農の延長線と見ることもできる。

ソビエト連邦時代の高麗人は、既に一つの共和国ではなく二つ以上の共和国の「人民」として暮らしてきた。沿海州ソビエトの人民であった彼らは、強制移住を通して

1) 熊本学園大学・教授 (外国語学部)

ウズベキスタンやカザフスタンソビエト共和国の人民になっていたように、高麗人はソビエト共和国を横断する人民、即ち「多共和国人民」として生きてきたといえる。

ソビエト連邦が解体された後登場した独立国家共同体 (CIS) 時代の高麗人は、より良い農地を探してウクライナ南部、ロシア、故郷であった沿海州、あるいは韓国へ新しい移住先を求めて行った。「人民」から「市民」に高麗人を規定する名前は変わっていったが、一つの国家ではない国境を横断する多国家市民として生きていかなければならない彼らの運命まで変わったのではない。この文では、ソビエト社会主義共和国連邦の解体後、高麗人がどうやって「多共和国人民」から「多国家市民」に変わって行ったか、ソビエト連邦の解体以前から韓国へ移住してきた現在までの生の軌跡を追いながら探ってみる予定である。

2. 多共和国ソビエト連邦の人民²⁾

ソビエト初期の共産党は「民族と民族的偏見に対する譲歩政策」 - 民族形成 (コレニザーツィヤ;) を図ったため、沿海州の高麗人には制限が多かったが、少数民族としての高麗人独自の文化を維持しながら多民族共和国の人民として成長することができた。

しかしソビエト連邦はソビエトに対する愛-民族融合への転換を主張した「ソビエト愛国主義」を強調し、その結果、高麗人は中央アジアに強制移住させられることになった。その後、高麗人は特別移住民として分類され、居住移転の自由のない「敵性人民」として生きて行かなければならなかった。「敵性人民」として分類された高麗人は、ソビエト人民としての公民権を回復するための努力を重ねなければならなかったが、これは第2次世界大戦の直後に登場した「社会主義労働英雄」になるための献身的闘争として具現された。

ウズベクとカザフのソビエト共和国における高麗人の居住環境は、ヨーロッパで長い間維持されてきたユダヤ人のゲットーと似ていた。高麗人の居住は制限され、彼らの生活もやはり暴圧的に拘束された。高麗人はこのようなゲットーから脱するため必死だった。その転機となったのは第2次世界大戦であった。高麗人はいわゆる「大祖国戦争」期間中、「社会主義愛国」を通してゲットーから脱する方法を体得できた。しかし彼らが特別移住民から脱することが出来たのは、スターリンの死 (1953年) の直後の1956年、「特別移住民の居住制限の措置解除法」が発表された後であった。

ソビエト社会主義共和国連邦は1930年代の中盤以後、連邦主義の完成のため、特

2) ソビエト社会主義共和国連邦とは、「国家 (共和国たち)」を越える「(一つの) 国家」といえる。これ故、「多国家」ではない「多共和国」という表記が適切であろう。

に1938年には党の中央執行委員会を通して、民族共和国の内のすべての学校でロシア語を必修科目として指定するように命令した。このような措置により各民族経済機関が廃止されるなど、各ソビエトは急激に中央集中化する結果を招いた。

これは「ソビエト愛国主義」とも関係がある。この時の「愛国」とは共和国（国家）を越える国家、即ちソビエト社会主義共和国連邦に対する愛国を意味する。これは「民族と民族的偏見に対する譲歩政策」 - 民族形成（コレニザーツィヤ）から「すべての労働者の祖国」であり「唯一の社会主義国家」としてのソビエトに対する愛-民族融合としての転換を意味することであった³⁾。しかし「ソビエト愛国主義」が完成されたのは、ドイツのソ連侵攻とこれに対するソ連のいわゆる「大祖国戦争」を通してであった。

高麗人が大祖国戦争に積極的に参加したのは、強圧により仕方なく参加した面もあるが、「労働者の祖国」或いは「ソビエト人民の祖国」を建設しようとする高麗人の熱意と意志があらわれたという見解もある。もちろん高麗人はいつでも敵国のスパイになりうる「特別移住民」であった。多くの高麗人たちは大祖国戦争のために進んで軍に入隊したかったが⁴⁾、結局彼らが動員されたのは後方の「労働軍」であった。

高麗人が労働軍として動員された所は、主に石炭鉱山、石油およびガス採掘、道路建設地等であった。たまには強制労働収容所に配置されたりした。このような動員が終了したのは戦争が終わった45年から47年の間であった。労働軍に動員された高麗人は、戦線には参加できなかったが、他のソビエト人民と同じように全世界労働者たちの祖国ソビエト共和国のための戦争に参加することが出来たのをうれしく考えていた人々が多かった。これは中央アジアの高麗人コルホーズにおける英雄的成功話とも関係がある。

かつて1927年の末、第15次党大会以後、農業集団化を推進してきたソビエト連邦はコルホーズ、ソフォーズ、MTC（機械トラクターセンター）体制を構築したが、1933年から35年までの大飢饉など問題が多く発生したため、ソビエト連邦は安定的な食糧の確保が重要課題となった。政治的な理由だけではなく、安定的な食糧確保のためにも、高麗人の強制移住が行わなければならなかったという説が説得力を持つ根拠の一つでもある⁵⁾。

3) 「ソビエト愛国主義」は「自分の祖国に対する無限の愛、果てしなく高貴な感情、祖国の運命と防衛に対する崇高な責任感で燃える情緒」とプラウダ紙は社説で定義したことがある。（최대희, 「소비에트 민족정책과 스탈린의 민족문제 '해법」, 『인문과학』 16집, 2003, 250~3쪽.; 서규완·이완중, 「사회주의와 민족문제-소련의 민족 정책을 중심으로」, 『슬라브연구』 제 23 권 1 호, 2007, 14~20 쪽.)

4) 高麗人青年たちの中には国籍を偽ったり、姓を変えて自ら入隊したケースもある。金アナトリも「サダコフ」というウズベクの姓に変えて軍に入り、16個の勲章をもらった。閔アレクサンドロ大尉はソ連英雄の称号ももらった。（김호준, 앞의 책, 256~9 쪽.)

5) 強制移住以前（1928年の春）、稲作の経験を伝授させるため、沿海州からカザフスタンに高麗人

1937年以後強制移住させられた高麗人はウズベクとカザフ地域に集団居住し始めながら、高麗人コルホーズを建設することになった。ウズベクのタシュケントだけでも1938年の春、「新生活」「赤い東方」「新しい道」等、9千8百7所帯20個の高麗人コルホーズが作られた。特に1940年、高麗人コルホーズ「北極星」に新しい会長として金炳華が選出され、生産手段は2倍、財政収入は4~5倍、米収穫量は2.5倍になった⁶⁾。

金炳華は、コルホーズとMTCについて持続的に問題提起をした結果、コルホーズの中に各種の農機械は勿論、水力発電所まで揃えることが出来た。金は、綿花農業でも大きい成果を出し、第1次「社会主義労働英雄」勲章をもらった。1949年には、稲作ブリガディール(作業班ブリガータの責任者)と分組長が社会主義労働英雄勲章をもらった。1951年まで北極星コルホーズでは21名の社会主義労働英雄が誕生し、金炳華は1951年「穀物多収穫及びコルホーズ経営管理」の業績で、再度「社会主義労働英雄」称号を得た⁷⁾。

カザフスタンのクズロルダの「先鋒コルホーズ」の金萬三も高い稲の収穫量で2回、赤い労働勲章とスターリン賞をもらった。「先鋒コルホーズ」は5年間で、稲作の播種面積を4倍も広げ、彼の名前を付けた「金萬三農耕法」を知らない人がいないほど、高麗人コルホーズはソビエト全域に彼の名を上げた。高麗人コルホーズは黄麻でも優れた収穫成果を出し、100名以上の高麗人が社会主義労働英雄の称号を得た⁸⁾。

問題は農業生産における優れた成果と多くの社会主義労働英雄を、高麗人コルホーズがどのように輩出できたかという点である。「特別移住民」として分類され居住移転の自由もなく、敵性民族(人民)なので正式軍人にもなれず労働軍として動員され、高麗の語も文も教えられず、故郷の遠東を偲ぶ詩すら書けない状況から出た成果なの

たちが招聘されてきたことがあるが、彼らはその後、高麗人農業協同組合カズリス(カザフスタンの米)を作ったりした。(홍응호, 「<레닌기치>에 나타난 1938년 카자흐스탄 고려인 사회」, 『아시아문화연구』 32집, 2013, 352~3쪽.)

- 6) 「北極星」コルホーズの金炳華は、1941年から綿花栽培にも成功したが(最初22トン収穫)、1947年には165トンの綿花を収穫し、社会主義努力英雄の称号を得た。(황영삼, 「우즈베키스탄 고려인 경제공동체의 형성과 발전과정의 제조명- '북극성' 콜호즈의 경제적 업적을 중심으로」, 『역사문화연구』 26집, 2007, 46~57쪽.)
- 7) 金炳華は、その他、4回のレニーン勲章、10月革命勲章、2回の労働赤旗勲章、各各1回の10月革命勲章と労働標識勲章を受賞した。
- 8) これをスタハノフ運動の結果としてみる見解もある。ウクライナのドンバス中央炭鉱で働いていた鉱夫スタハノフによって始まったこの運動は、「社会主義的競争」を誘発するため、計画経済過程で農産物と工業生産物の成果を出すための運動である。高麗人コルホーズは強制移住の直後の1938年、特に播種と秋の取り入れ事業でスタハノフ運動を積極的に行い、10月革命記念日には、多様な副賞をもらったという内容が『レニーンの旗幟(레닌의기치)』に紹介されたりした。(홍응호, 「강제이주 직후 중앙아시아 고려인 사회의 스타하노프 운동」, 『한국사학보』 54호, 2014, 230~7쪽.)

で、より驚くべき結果と言える。これに対して多数の研究者たちは、「農業生産力の拡充を狙ったソビエト連邦の選択」、「同族の結束」、或いはソビエト連邦の迫害から生き残るための「生存」の結果という分析をした⁹⁾。

しかし当時のこのような結果は、「仕方ない選択」ではなく「積極的な指向」の結果と言え、「同族の結束」ではなく「ソビエト人民」指向の結果と言える。当時の彼らの内面世界を探るためいくつかの文学作品と手記を調べてみよう。

私の心臓に刻まれているイリイチは/いつも優先優先です/(中略)/本当に復活するなら/私たちはどうすべきか?/言うまでもなく歯を食いしばって/汗を絞り出し/瞬間を戦わなきゃ/(後略)¹⁰⁾

私たちは新天地に暮らしています/私たちの先祖が/夢にも思わなかった/荒野で暮らしている/(中略)/トラクターの犁の端に/掘り返された肥沃な地の中に/私たちは/聖なる希望の中で暮らしています/(中略)/私たちの踏み固めた足跡から/黄金の穀物が熟れ/(後略)¹¹⁾

私に自由を与えたレニンの息吹き/自分の国を建てられるようにしてくれたレニンの息吹き/新しい生活を教えてくれたレニンの息吹き//レニンの思想は私の息吹き/レニンの生涯は私の息吹き/レニンの党は私の党¹²⁾

ここに引用した詩は、「耕す乙女よ」という詩が問題になって21年間の流刑生活をしなければならなかったカン・テスと、「わが故郷の遠東を誇る」と「私は朝鮮の人である」という詩で各々の故郷を描いていたキム・セイルとキム・ジュンの詩作品である。しかしこれらの詩作品は、同じく「ソビエト人民」として新しい中央アジアの地で力強く暮らしていくことを描写している。

勿論このような作品態度が「どのような作品でも肯定的な人物が主人公にならなけ

9) 윤병석 (2011), 이채문 (2012), 임형모 (2012) の文を参照。その他, 労働軍として男性多数の労働力が動員された状態での高麗人コルホーズの女性の活躍に焦点を合わせたジェンダー研究もある。(기계형, 앞의글, 2011.)

10) 강태수, 「내 심장에 새겨진 레닌」, 『시월의 해빛』, 알마아따작가출판사, 1971년.; 이명재 편 (2002), 97 쪽.

11) 김세일, 「우리는 새 땅에 살아요」, 『시월의 해빛』 (1971); 이명재 편 (2002), 133 쪽.

12) 김준, 「레닌의 숨」, 『숨』, 알마아따사수출판사, 1985, 14 쪽. 洪範圖を描いたキム・ジュン(김준)の小説『十五万ウォン事件』は、「スターリン死後, 高麗人の位相が復権される中, 忘れられたり否認された高麗人の歴史を蘇らせながらも, 依然としてソビエトに傾いた意識を見せている。スターリン死後, 高麗人の環境が良くなって行ったが, まだ歪曲されている自分の存在を証明しなければならぬ状況だったのが推測できる」という評価(이정선, 「김준의 <십오만원 사건>에 나타난 항일투쟁의 형상화 고찰」, 『국제한인문학연구』5, 2008, 94~5 쪽.)のように, 高麗人の「ソビエト人民」への意志表明に対する評価は、「強要による不可避なもの」という評価が一般的である。

ればならなかったし、その肯定的な人物は一定な枠の中で暮らしながら勤労し思考する人物ではなければならなかった¹³⁾ というリャン・ウォンシクの手記のように、仕方なく選択した社会主義リアリズムの手法だったともいえる。しかし高麗人の哀歓を描いた戯曲作品で多く愛されていた沿海州の新韓村出身であるヨン・ソンヨンの次の文から、「ソビエト人民」になろうとしていた意志は、ただの仕方ない消極的な選択ではなく、内面化されていた高麗人たちの積極的な意志だったのが推測できる。

旧ソ連など社会主義国家で実践されていた社会主義を何の疑いもなく信じていたし、人類は必ずみんな社会主義と共産主義に到達すると信じていた。まさに私たちは、搾取もない世界、全人類が兄弟になった幸福人間たちの共同体、強盗も、泥棒も、戦争もない綺麗で高尚な世界、その世界の旗幟には赤い文字で、「自由・平等・愛」と書かれていて、人々はその旗幟の下で永遠な幸福を享受すると信じていた。¹⁴⁾

通り過ぎた 80 年を振り返りながら 1980 年代の後半に書いたヨン・ソンヨンのこの文から、1937 年の強制移住以後、「ソビエト人民」に向けた高麗人の社会主義愛国心、即ちソビエト人民への意志がどれくらい強かったかが把握できる。「全人類が兄弟になる幸福な人間共同体」、祖国と呼ばれたソビエト共和国連邦に向けた高麗人たちの熱情は、その方法と目標に対する価値評価とは別に、民族と共和国を越えたところの人民になろうとしていた真摯で熱いものであった。

3. 多共和国ソ連の人民から多共和国ソ連の市民へ —長距離「コボンジル」とソビエト共和国を越境する遊農

スターリンの死亡は、中央アジアの集団居住地にも多大な影響を及ぼした。1953 年のスターリン死亡後、56 年に開催された第 20 次ソ連共産党大会で、フルシチョフはスターリンの路線を批判し始め、強制移住など少数民族政策もやはり批判されることになった。1956 年 7 月、ソビエト共和国連邦の最高会議は「特別移住民の居住制限措置の解除法」を発表し、その結果中央アジアの高麗人にも初めて居住移転の自由が与えられた。

13) 량원식, 「보다 진실하고 대담한 작품을 쓰자」(리ャン·ウォン시クの詩に関する研究としては, 홍용희, 「구 소련 고려인 디아스포라 시 연구-양원식의 시세계를 중심으로」, 『한국근대문학연구』 22, 2010 等参照).

14) ヨン・ソンヨンは、晩年にキリスト教を受け入れ、初めて社会主義体制を否定的に見ることになったと回顧している。연성용, 『신들메를 줄라 매며』, 예루살렘, 1993, 105 쪽. 박명진, 「고려인 희곡문학의 정체성과 역사성-연성용 희곡을 중심으로」, 『한국극예술연구』 제 19 집, 2004, 209~210 쪽.

しかし個人的移住ではない集団移住は、法的動機より経済的動機によって行われるケースが多かった。スターリン死後、高麗人の集団居住に直接的影響を及ぼしたのは、コルホーズの統廃合であった。MTS (機械トラクター供給所) が廃止され、運営状態が良くないコルホーズ (集団農場) は、状態が良いコルホーズに統廃合されるかソフオーズ (国営農場) 化された。相対的に運営状態が良かった高麗人コルホーズは運営状態が劣悪だった「地方民」¹⁵⁾ たちの負債を引き受けるしか方法がなかった。

収入も減りコルホーズの主導権さえ消えてしまったので、移住の自由を与えられた高麗人たちはコルホーズを離れ、都市近隣に居所を移した後、コボンジル¹⁶⁾ に専念した。コボンジルが初めて生まれたのは第2次世界大戦中という説が一般的である。高麗人男性の多数が「労働軍」として動員された状態で、足りない労働力を解決するためコボンジルが生まれたと言われている。

コボンジルとは「多数の人々が共同で行う事業に各々が出す元手」という意味の「股本 (コボン)」に「行為」という意味の「ジル」が結合された言葉¹⁷⁾ で、「投資された元手を基にした協同労働組織、あるいは投資された元手と労働を基にして得られた共同収入を配当する方式」¹⁸⁾ を意味する。コボンジルはコルホーズ作業班 (ブリガータ) の形態をそのまま維持しているが、ブリガータの代表である高麗人ブリガディールは自分を頂点にする高麗人親戚の小共同体を切り回した。コボンジルが高い成果を出した背景には、親戚中心の小共同体の紐帯感と結束力が存在したという評価が一般的である。

このようなコボンジルが本格化したのは、1953年のスターリンの死後、コルホーズ統廃合による不満を、これ以上我慢できなかった高麗人コルホーズ所属の高麗人たちが、より採算性の高い地域に、コボンジルを営むために旅立つ頃からである。居住

15) 強制移住後、新しい定着民であった高麗人たちは、中央アジアの土着民たちを「地方民」と呼んでいた。開放後、ロシア或いは韓国などに新しく移住し始めた高麗人たちも、その住民を同じく「地方民」と呼んでいるかは疑問である。

16) 「コボン (股本) ジル」については、백태현・이애리아, 「중앙 아시아 고려인의 고본질」, 『비교문화연구』 6집 1호, 2000. 이채문, 「재외한인의 자영업에 관한 연구: 카자흐스탄 고려인의 사례를 중심으로」, 『한국동북아논총』 제 46집, 2008. 이복철, 「고려인 농업형태인 고본질의 변화와 시설농업의 전망」, 『전남대학교 세계한상문화연구단 국내학술회의집』 10, 2007. 양원식, 「중앙 아시아 카자흐스탄 고려인들의 사회문제」, 『재외한인연구』 7-1, 1998. 等を参照。

17) 「コボン」を「コボンジルに参加する一つの個別家戸が耕作する土地の面積」とみる見解もある。「今回、1コボンの草取りをした、或いは2コボンの草取りをした」という表現から分かるように、労働力が豊富な家戸は1コボンではなく2コボンを耕作できるため、個別家戸の構成比率によってコボンの面積も変わられるという見解である。(백태현・이애리아, 前掲書, 71~2頁.)

18) このような이채문 (前掲書, 14頁) 等の定義とは異なる定義としては、백태현等の見解がある。「高麗人が家族単位で構成されている小共同体 (ブリガータ) を組織して、農繁期には自分の居住地から離れ、近距離あるいは長距離で土地を借用して、生産から販売に至る営農の全過程を修行する移動賃貸農業」として定義 (前掲書, 70頁) している。

及び移住の自由が「長距離コボンジル」に勢いをつけたのは勿論である。

コボンジルはソビエトが崩れた直後の1985年、合法化された。ソビエトの崩壊後、長距離コボンジルは国家間の取引になってしまったため多くは無くなったが、まだ依然として維持されている。社会主義的方式と資本主義的方式を結合し、生産と流通を統合した複合営農方式であるコボンジルは、いまだに高い生産性と収益性を出しているためである。長距離コボンジルは、遊牧の地である中央アジアで生まれた「ソビエト遊農」であり、一種の「ソビエトドリーム」であった。ソビエト共和国の国境を横断する経済単位・経済主体であり、社会主義と資本主義を横断する経済システムでもある。

長距離コボンジルは、ウクライナ、南部ロシア、沿海州まで行われた。コボンジルは3月に家を出て、10月に戻ってくる苦しい労働である。しかし高い収益を保障するものなので、高麗人の多数はコボンジルを行い、コボンジルで稼いだお金で運送手段の必需品である自動車を購入し始めたが、これは都市への移住を可能にした。都市への移住は逆説的にコボンジルに最も必要とされる農村の小共同体を解体し、農村共同体の中で維持してきた言語と文化の喪失を催促した。母国語の喪失速度はソビエト連邦の上位の少数民族34個の中、2番目になる程であった¹⁹⁾。

中央アジアの高麗人たちがゲッターから外れるやすく始まった高麗人たちの長距離コボンジルと都市移住は、ソビエト時代にずっと維持してきた家族あるいは民族共同体を解体させた。中央アジアの高麗人コルホーズを中心にした定着型民族共同体が解体され、ソビエト共和国の国境を横断する遊農時代が到来したのだが、これを招来したのは「長距離コボンジル」であった。

長距離コボンジルは、また「ソビエト社会主義共和国の人民」になろうとしていた意志も変貌させた。コボンジルは社会主義的コルホーズシステムに資本主義的経営システムを結合した形態で、ソビエト人民としての役割を、高麗人たちが自ら社会主義の内部から停止させて行ったと言える。結局、高麗人は「長距離コボンジル」を通して、自分自身を「ソビエト人民」から、ソビエトを横断する「多共和国市民」に漸次に変貌して行った。

19) 高麗人コルホーズ「先鋒」を離れた理由は、教育(44%)・結婚(19%)・軍服務(17%)の順であった。教育と身分上昇が主な理由であった。高麗語を母国語として考えている高麗人は59年(79.3%)、70年(68.6%)、79年(55.4%)、89年(49.4%)である(김호준, 前掲書, 305~6頁.; 김승화, 『소련韓族史』, 대한교과서주식회사, 1989.). 長距離コボンジルで生活の余裕ができた60~70年代の都市化の結果ともいえる。

4. 多共和国ソ連の市民からユーラシア多国家市民へ

ゴルバチョフの登場は高麗人の生き方を転換するもう一つの転機であった。ペレストロイカとグラスノスチを経過する中で、はじめて高麗人は強制移住を批判する声を挙げる事ができた。1989年旧ソ連共産党は「民族政策綱領」を発表し、11月には共産党中央委員会が自ら過誤を認め、少数民族の権利を回復することを宣言したためである。しかし「ロシアの高麗人の名誉回復に関する法」が正式に制定されたのは、1991年共産党解体とソビエト連邦の15個の共和国が分離独立を宣言し独立国家共同体(CIS)を設立してからである。「ロシアの高麗人の名誉回復に関する法」はロシア連邦最高会議によって1993年4月制定された。

高麗人には強制移住以前の居住地に帰還する権利と、ロシア連邦から移住する場合国籍を回復する、あるいは獲得する権利などが与えられた。しかしこれらの権利を実現する具体的手続きが何ら備えられなかったため、実際に権利を回復する、あるいは保障する方法はないに等しかった。むしろ諸独立国家は高麗人を「帰還」でなく、事実上、また他の「遊民」の道に追い出したといえる。

高麗人が移住の自由を得て自ら根拠地を離れたのではなく、独立国家から追い出されるようになった背景には、言語、宗教、経済、教育政策の変化が上げられる²⁰⁾。諸独立国家は公式書類をロシア語から自国語に転換し、コルホーズの代表や管理が先住民(地域人)中心に再編されたためである。

あの人たちの言葉で生きていかなくちゃ、私たちは。/彼は力が抜けた。あの人たちの言葉、という理由の前に、彼女の口から出てきた「私たち」という言葉が彼を呆然自失にした。(中略)

42歳になる異教徒の男に4番目の妻として嫁ぐために21歳の高麗人の娘に変装した悲しい魔女のようだ。(中略)

ハイル/と、はきはきとした澄んだ声で叫んだ。その単語がウズベクの別れの挨拶だということぐらいは、彼も知っている。(中略)「タスピターニャ」と言ってくれよ、彼は独り言を言った。彼女のものであり、彼にもなじみのあるロシア語で挨拶をしてくれない彼女が、最後まで素っ気ないという気持ちがあった。²¹⁾

イスラム文化への転換、ウズベク言語への転換という環境に適応しなければならないウズベキスタン少女と別れるしかない少年が、幼いときの友達であった少女と別れるとき聞かなければならなかった言葉は、お互いに慣れ親しんだロシア語の「タツピダニャ」でなく、ウズベク語「ハイル」であった。彼女はイスラムの慣習のとおり異

20) 김계르만, 「CIS 고려인의 역사성과 정체성」(원제: 소련의 붕괴와 CIS 고려인들), 『세계 한민족 포럼논문집』, 2009, 274~5 쪽.

21) 허혜란, 「아냐」, 『체로키 부족』, 실천문학, 2008년, 32~35 쪽. 허혜란은 우즈베키스탄で滿2年の間高麗人の集團農場学校に留まって海外奉仕団員の資格で韓国語を教えた。

教徒の男の四番目の妻になった。

カザフスタンよりもウズベキスタンから抜け出そうとする高麗人が多かった。彼らは中央アジアの独立国を抜け出してロシアや韓国を訪れた。高麗人がロシアを訪れた理由の中で一番重要なのは言語であった。もちろん経済的な理由も大きかった。高麗人はコボンジルをしに通ったロシア南部のボルゴグラードやブッカブカス地域に農業移住を始めた。ロシア南部やウクライナは長距離コボンジルで通った道なので馴染み深いというもあるが、ウズベキスタンなどと農業環境をはじめとして多くの点で似ていたからである²²⁾。ロシア遠東の沿海州への移住(帰還)も増えた。1990年以降沿海州ウスリスク地域に2万人が移住したのを含んで約4万人の高麗人が移住した²³⁾。

独立国家共同体に属している高麗人の中ではロシアでなく韓国を訪れた人々も多い。2007年訪問就業制度が導入された以後、2014年4月現在訪問就業ビザ(H-2ビザ)の資格として来韓した13,647人を含んで在外同胞ビザ(F-4ビザ)と永住ビザ(F-5ビザ)などの資格として約3万人が韓国に居住している²⁴⁾。韓国で高麗人集団居住地域はソウル特別市クワンヒドン²⁵⁾、安山市ダンウォン区、光州広域市クワンサン区などがある。特に安山市ダンウォン区のソンプ2洞、一名テッコールには約3千人程度の高麗人が居住しているが、これら高麗人はほとんどメッキ業者、染色業体、派遣労働などいわゆる「黒い労働」と呼ばれる3D業種で仕事をしている²⁶⁾。テッコールの労働相談所の統計によれば、労働相談の半分程度が「賃金未払い」であるが、その大部分は韓国語が通じないのがその理由だと言う²⁷⁾。

22) 이복철, 앞의글, 59~64쪽. 러시아南部に移住した高麗人は6万~10万と推定される。ボルゴグラード側に移住してきた高麗人の中でウズベキスタン出身は概略62%に達する。コボンジルで通ったウクライナなどの地に移住した高麗人の中には、新たに独立国家が登場した以降適切な手続きを踏むことができなく無国籍者になった高麗人も多い。概略3万~4万程度と推定される。김호준, 앞의책, 463~7쪽.

23) 沿海州の高麗人の人口は79年に8,125人, 89年に8,454人, 94年に18,260人に増えた(심현용, 「뿌전시대의 러시아 민족정책과 한인사회전망」, 『아시아 태평양지역 연구』3권1호, 아시아태평양지역연구소, 2000)。

24) 2014年4月現在, 訪問就業者(F2)はウズベキスタンから11,498人, カザフスタンから851人, 在外同胞(F4)はロシアから4,151人が来韓した(법무부출입국·외국인정책본부, 「출입국·외국인 정책 통계월보: 2014년 4월호」, 2014년 5월, 33~35쪽)。

25) ソウル光熙洞には, 高麗人等約7万の移住民が居住している。(해위문화홍보원, 「서울 속 작은 러시아」, 『코리아넷뉴스』, 문화체육관광부, 2013. 2, <http://kocis.go.kr/koreanet/view.do?seq=1464>)

26) テッコール(땃골)で, 高麗人の夜学「ノモ(너머)」と労働相談所である「ビョルビョル(별별)相談所」を運営しているキム・スンリョク代表は, 「訪問就業(H2)ビザを持っている人は最長4年10ヶ月しか居住できないため, 在外同胞(F4)ビザを持っている高麗人たちは非専門職労働に就業できないため, 不法就業を敢行するしか方法がない」という(2013年2月インタビュー)。

27) 高麗人の支援団体「ノモ」のキム・ヨンスク理事は, 「言語疎通が円滑ではないので, 賃金未払い等問題が多く発生しているので, 夕方9時から夜11時頃まで, 10代から60代までの高麗人20~30名が一緒に集まって韓国語の勉強をしている」という(2013年2月のインタビュー)。最近「青少年中心の高麗人バンドの結成, 高麗人村祭り等の多様な高麗人街づくりにも力を入れている」という。

安山市テッコルの高麗人支援団体である「ノモ(越える)」と高麗人支援のための「安山市民円卓会議」「安山希望財団」などは高麗人移住 150 周年をむかえて当面の高麗人問題を解決するために「高麗人総合支援センター」を建立することにし、その前に「高麗人未来世代センター」を建立することにした²⁸⁾。高麗人の両親たちが明け方早く手配師の車に乗り、仕事に行き夕方遅く帰ってくるのに、その間子供たちが気楽に遊んだり勉強したりする空間と子供たちを世話する人がいないためである。

すでに高麗人を支援する高麗人センターと子供の家、高麗人児童支援センター、高麗人協同組合を作って運営する地域もある。光州広域市クワンサン区、ウォルトク洞一帯の高麗人集団居住地域には各種高麗人支援施設が設けられているだけでなく、光州広域市は全国で最初に「高麗人住民支援条例」を制定・公布した。

このような支援に力づけられて光州広域市クワンサン区に居住している高麗人数(2012年)は5年前に比べて概略3倍ほど増え、「高麗人センター」などの支援センターの周辺には高麗人食品店、旅行会社、ウズベキスタン食堂などが生じ始めた²⁹⁾。

しかし、韓国での高麗人の暮らしが辛く厳しくないのではない。韓国の最低賃金(時給)5,210ウォンはそのまま高麗人の賃金になる。残業を含んで一日10~12時間ずつ週6日間仕事をすれば、女性は平均100~150万ウォン、男性は120~180万ウォンを儲けることができる。保証金50万ウォンで家賃20万ウォンの小部屋に住みながら、50万~100万ウォンを中央アジアに住んでいる家族に送金すると、1ヶ月の生活費は家賃20万ウォンと各種税金を含んで概略50~60万ウォンにしかならない³⁰⁾。安山テッコルの小部屋の町ではもっと小さい小部屋を作るための工事が続いている。

同じように顔がない。目と鼻と口がない、丸い空間だけだ。顔のない彼らがユ老人の画幅の中から少年に近づいて来はじめた。空っぽの顔たちが喚き立てている。目を描いてくれと哀願しているようだ。(中略)

父は、3年間だけソウルで働いた後、戻ってくると約束した。ソウルでは熱心

28) 김효실, 「안산땀골에 첫고려인 자녀 지원센터」, 『한겨레신문』, 2014. 1. 15.

29) ハナム工団, ピョンドン工団, ソチョン工団などが集中している光州広域市のコアンサン区ウォルゴク洞とサンジョン洞一帯の「高麗人村」には、2004年頃から他の高麗人労働者たちと共に高麗人1千名が居住している。2009年1月、「高麗人センター」がオープンし、高麗人の子女のための公立委託代案学校である「セナル学校」(2009年)開校、共働き夫婦の高麗人子女のための「セナル保育園」(2012年)・「高麗人村の地域児童センター」(2013年)オープン、「高麗人村の協同組合」(2013年)設立などが続いた。2013年10月1日には、「光州広域市の高麗人住民支援条例」が全国で初めて公布された。(김경학, 「중앙아시아 고려인의 한국 이주와 정착: 광주 '고려인마을' 을 중심으로」, 『국제지역연구』17권4호, 2014, 273~5쪽.)

30) 京畿道安山のテッコル資料は、2013年2月に実施したインタビューと、『ハンキョレ新聞』の記事(신소영, 「고려인촌 바뀐 '땀골'-가게 진열 보드카만이 '검은노동' 위로」, 2013. 9. 15.)をはじめ、光州市ウォルゴク洞の高麗人村に関するデータとしては、김영술・홍인화의論文(「중앙아시아 고려인의 광주지역 이주와 문화변용에 관한 연구」, 『디아스포라연구』7권1호, 2013, 153쪽.)などを参照。

に働いたらお金を稼げるといった。そのお金なら少年とユ老人が飢えなく生きて行けるといった。絵のせいだ。少年はもう一回叫びだした。(中略)

少年はこぶしを握ったまま絵を叩きはじめた。絵が揺れた。絵の中にある汽車ががたんと動いた。人々をいっぱい乗せていた貨物汽車が鉄路の上を駆け出し始めた。/ガチャンガチャンガチャン.../少年は両手で絵を止めた。動かないで。ここに近づかないで、止まると。しかし汽車は動き続け、人々の叫びも止まらなかった。³¹⁾

小説『父はソウルにいます』は、韓国へ出稼ぎに行ったウズベキスタンの高麗人少年の父が送る疲弊した暮らしと、強制移住の汽車に乗った経験を持つ祖父の世代の暮らしを結びつけている。中央アジアに向かった移住列車は1937年に止まったわけではなかった。移住列車は今でもロシアと韓国を軋みながら行き来している。少年はその列車が止まることを望むが「汽車はずっと動き、人々のわめき」もまた止まらない。シン・スンナムの連作絵画「レクイエム」のように絵には顔がない。彼は「名前も民族もない奴隷」だったために顔を描き込まなかったというが、「顔のない奴隷」は中央アジアで完了型となったのではなく、彼の「歴史の中の祖国」である韓国において相変わらず現在進行型なのであった。

韓国の多くの支援団体は高麗人の疲弊した暮らしを、少なくとも故郷である韓国ではこれ以上繰り返してはいけなし、今でも「在外同胞法」を改正するために尽力している。在外同胞法は中国朝鮮族と高麗人を除外したという理由で違憲判決³²⁾を受けて以来、2004年に一度改正されたが、依然として多くの問題を孕んでいる。

「在外同胞法」を改正すべき理由は明確である。韓国が高麗人に韓国市民としての市民的・社会的権利と責務ではなく、移住労働者としての社会的権利の一部のみを与えているからである。高麗人が中央アジアとロシアを含む独立国家共同体の成員権のみならず、歴史的故国である韓国においても成員権を持つことができるように在外同胞法を改正するべきだと考えられるが、その場合高麗人は独立国家共同体のみならず韓国をも貫通する「多国家市民」としての生を営むこととなる。

しかし、在外同胞法の改正について提起されている議論の中で、特に「同じ血がながっている私の民族」であるから「外国人労働者より高麗人同胞を優先」しなければならぬという論理³³⁾は再検討の必要がある。このような論理は日本において日

31) 허혜란, 「내 아버지는 서울에 계십니다」, 『체로키부족』, 실천문학, 2008년, 229~231쪽.

32) 「1948年の大韓民国政府樹立」の前に出国した人を「在外同胞」の範疇から除外していた1999年の「在外同胞法」は、2001年「憲法不合致」決定(99헌마494)になったが、その理由は政府樹立以前の同胞を差別する等、憲法の平等原則に違反するということであった。2004年に新しく改正された法は、以後何回か新しく施行令を改正して問題点を補完したが、中国朝鮮族と CIS 高麗人を単に統制すべきの労働力としてしかみていない観点はあまり変わっていない。

33) 이천영, 「귀환동포 지원법 반드시 제정돼야」, 『경기도 외국인정책 간담회 및 지원단체 활동가 네트워크 활성화를 위한 워크숍 자료집』, 경기도 외국인 인권지원 센터, 2013. 11., 50쪽.

系人を雇用するために日本語と日本文化に馴染みのある在日コリアンを差別しようとする論理、あるいはウズベキスタンにおいてウズベク語をうまく駆使出来ない高麗人を差別しようとする論理とそれほど変わらない。より深刻な問題は、多くの支援団体の活動家と研究者が、高麗人に対する「同化政策」を更に推進しなければならないと主張しているということである。高麗人は「驚くべきことに皆が韓国国籍の取得を願っており、韓国人への完全な同化を願って」いるので、「韓国社会に同化しうる」ための全面的支援と政策を提供すべき³⁴⁾であると彼らは主張している。

これを後押しする理論的根拠として提示されているのは、積極的な「同化」を妨げる諸要因との闘争 (assimilation struggle) に関する研究³⁵⁾である。高麗人の低い韓国語能力と文化の差異を克服するために、どのように「同化闘争」を遂行するのかについての研究調査などがその主たる内容となっている。しかし、国境を行き来する高麗人の複雑極まりない状況を、どのようにして同化/同化抑制の二者に区分するのかという問題は依然として残る。もちろんこれらの研究は高麗人のトランスナショナルリティーを否定するものではない。しかし、アイデンティティの中心と周辺を明確にすべきだという主張には少しも妥協の余地がない。高麗人に対する政策は「円を描くコンパス」のように「片方の足は一つの地点に根をおろして動かないけれど、他方は一つの広い円を絶えず動かせなければならないのとも似ていて、「祖国に深い根をおろし依拠しながら、彼らが生まれた国家でも自由に暮らせるように」すべきだ³⁶⁾ということである。

ここで注目すべき言葉は「祖国」である。高麗人はかつて、後方ではあったとはいえソビエト連邦のための「大祖国戦争」を誠実に遂行したことがあり、コルホーズでの輝かしい功勞により「祖国」ソビエト連邦の労働英雄を多く輩出した。高麗人には三つの祖国がある。祖父が暮らした沿海州あるいはソ連が一番目の祖国ならば、家族が暮らしている中央アジアが二番目の祖国で、現在居住している韓国は三番目の、いわば歴史の中の祖国である。それならば、高麗人はこれら三つの祖国の中でどこを中心として円を描かなければならないのだろうか。

安山のある産災病院でキム・パロージャ氏は結核で息をひきとった。「遺骨だけでも親のそばに送ってください」という遺言の通り、彼の遺骨は「見知らぬ高麗人同胞

34) 김영술・홍인화, 「중양아시아 고려인의 광주지역 이주와 문화변용에 관한 연구」, 『디아스포라 연구』 7권 1호, 2013, 132~3쪽.

35) 移住民たちの同化過程を, (1) 集団居住地と位置選定 (2) 生産・収入・競争 (3) 同化闘争 (4) 家族問題および送金効果 (5) 選択・態度・公共政策として分けて探ってみた研究は, Gil S. Epstein, Ira N. Gang., "Migration and Culture", *Frontiers of Economics and Globalization Vol. 8: Migration and Culture*, Emerald: 2010, pp 8~12. 参考. (<http://www.emeraldinsight.com/books.htm?issn=1574-8715&volume=8>)

36) 김영술・홍인화, 前掲書, 157~8頁.

の手に持たせて再び国境を渡った」³⁷⁾ という。彼の葬儀室を訪れたリュ・アンドレイはキム・ジュンの詩「私は朝鮮人だ」を朗読した。『私はロシア遠東/イマン川辺の朝鮮の人だ』と始まるこの詩には、詩人キム・ジュン³⁸⁾が経験した「歴史の中の祖国」である朝鮮を懐かしむ心が切々と染み込んでいる。しかし、彼がこの詩で本来語ろうとしていたのは、自身がカザフ人ではなく沿海州(ロシア遠東)のウスリ川の支流、イマン(今のタルネレチェンスク)川辺の朝鮮人であるということだった。産業災害で息をひきとったキム・パロージャ氏は韓国の土地でなく両親のそば、故郷のウズベキスタンに埋められた。しばらくのあいだ留まった韓国と、帰る故郷であるウズベキスタン、そして遠東(沿海州)が、キム・パロージャ氏を通じてオーバーラップされる瞬間である。

高麗人にとって中心と周辺は固定されたものではない。中心と周辺は常に変化してきたものであり、今後も再び変化する可能性を秘めている。中国の朝鮮族に関する研究では、韓国より中国がさらに発展すると判断した朝鮮族の一部が中国への逆移住を考慮しているという調査結果³⁹⁾もある。その多くは、子供の教育のために中国に戻ると答えたのである。祖国が一つではないように、移住も一方向のみに行われてはいないことが分かる。

在日コリアンの場合もこれと大きくは変わらない。在日朝鮮人は1959年以降、帰国運動の一環として一部が北朝鮮人民民主主義共和国への移住を試みたが、まもなく中断されてしまった。その後、在日朝鮮人は日本で様々な差別を受けながらも、北朝鮮にも韓国にも集団的移住を試みることはなかった⁴⁰⁾。

高麗人も独立国家共同体の高麗人になってからはじめてコリアの南側、韓国を訪れた。しかし彼らも朝鮮族の逆移住と同じように、いつかロシアあるいは中央アジアへの逆移住を希望する日が来るかもしれない。今でも訪問就業(H2)ビザの終了、あるいは子供たちの教育などの理由により一時帰国または永住帰国する高麗人がいる。どこが故郷であり、どこに帰るべきか不明確な時代を高麗人は生きぬいているといえる。

37) 엄지원, 「3 대째만에 모국 왔지만, 염색공장에서 3년 일하다 폐결핵으로」, 『한겨레신문』, 2013. 9. 15.

38) 키ム・ジュンは、1900年ロシア沿海州で生まれ、モスクワ総合大学を中退した。以後、カザフスタン作家連盟の高麗人文化委員長を歴任し、長編叙事詩「四十八」、長編小説『十五万ウォン事件』などがある。

39) 한성미·임승빈, 「소수민족 집단체류지역(Ethnic Enclave)으로서의 연변거리의 장소성 형성 요인 분석」, 『한국조경학회지』36(6), 2009, 88쪽. 이해경, 「혼인이주와 혼인이주 가정의 문제와 대응」, 『한국인구학』제28권제1호, 2005, 89~93쪽.

40) 拙稿, 「재일코리안과 다국가시민권」, 『석당논총』56호, 석당학술원, 2013.

5. むすび

韓国での定住を希望している高麗人は、2007年の訪問就業制が実施された直後から急激に増えた。最近、独立国家共同体から来韓した高麗人は、約3万人に達する。ロシア沿海州、中央アジアへの強制移住を経て、再び韓国に入ってきた彼らは、これからは韓国に定着して定住する権利と責務を希望しているが、韓国において彼らが定住可能なシステムを構築する事は何よりも重要なことである。

ところが、高麗人を対象にした同化政策による国民づくりプロジェクト、あるいは韓国を「中心」にして高麗人の関連国家を「周辺」として包摂しようとする企画は果たして妥当なのか。この文はこの問いに答えるため準備したものであるが、その答えはそれほど簡単には得られない。しかし明らかなことは、国境を越え続けてきた高麗人の複雑な状況を同化・同化抑制という二分法で簡単に裁断できないということ。高麗人にとって中心と周辺とは固定されたものでないということ。高麗人にとって中心はある時はソビエト連邦で、ある時はロシア、ウズベキスタン、北朝鮮、または韓国であって、ある時は中心がこの中の一つではなく二つ以上になった時もある。

これをより厳密に探ってみるためには、ソビエト社会主義共和国連邦の解体以前と以後の高麗人の生はどうだったのか、特に共和国あるいは国家を横断する生をどのように営為してきたかを注目してみる必要がある。ソビエト共和国連邦時期の高麗人が、共和国と共和国を横断する「多共和国人民」として生きてきたとすれば、ソ連の解体後の高麗人はソビエト共和国ではない、たとえばウズベキスタンとウクライナあるいはロシア「国家」を横断する「多国家市民」として生きてきたと言える。

勿論ソビエト共和国連邦の解体後もそうであるが、共和国連邦時代の高麗人の生もやはり、連邦時期ずっと同一だったのではない。強制移住以前と以後も違うし、スターリン死後フルシチョフの登場以前と以後も違う。強制移住と共に高麗人は、居住制限された特別移住民、即ち「敵性人民」として烙印を押された。しかし中央アジアのソビエト共和国に居住していた高麗人は「敵性人民」から抜け出し「ソビエト人民」になるため不断的な努力を尽くした。高麗人は第2次世界大戦中に「労働軍」として参加したり、「社会主義英雄」になるように努力した結果、1953年フルシチョフの登場と共にやっとソビエト共和国の人民になることができた。ソビエト共和国連邦時代を通してずっとソビエト共和国の人民だったのではないが、高麗人は沿海州と中央アジアの共和国を横断する「多共和国人民」であった。

尚、厳密に時期を区分すると、「多共和国人民」の直後に、「多国家市民」が登場したのではない。敵性人民から解放され居住移転の自由を獲得した高麗人は、高麗人特有の少数民族共同体とコルホーズの基盤システムを活用した遊農型の長距離コボンジル農業をし始めたが、これはソビエト経済と市場経済を結合したものである。長距離

コボンジル農業は、一つのソビエト共和国単位でなされたのではなく、いくつかのソビエト共和国を越え続けながら生産と流通が共になされたが、高麗人はこのようにソビエト共和国の国境を越え続けながら市場経済を行う市民、即ち「多共和国市民」と言えるであろう。

ソビエト共和国連邦の解体以後も、高麗人の長距離コボンジルは、独立国家ウズベキスタン・ウクライナ・ロシアなどを横断しながらなされてきた。時には無国籍者になったりもしたが、にもかかわらず高麗人は独立国家共同体 (CIS) の中で、独立国家の国境を越え続ける「多国家市民」になって行った。各中央アジア国家の言語、教育、経済政策などが彼らに国境を超えるように誘導した一つの要因ともいえる。もちろん韓国の在外同胞政策が高麗人の韓国への越境を促す一つのきっかけになったこともある。

韓国への越境を行った高麗人は再び韓国の国境を越えることが出来、また越える自由もある。韓国で労災で亡くなった高麗人キム・パロージャ氏が父母の故郷ウズベキスタンの土に埋葬されることを希望したように、韓国に定住しようとしていた中国朝鮮族の一部が、経済的発展の可能性がより高い中国への逆移住を希望しているように、高麗人は韓国に局限されている存在ではない。勿論このような理由が高麗人の韓国における成員権を制限する理由になってはいけない。言葉通り、韓国と独立国家共同体の中の全ての国家において自由に社会的・政治的権利と責務を果たすことができる多国家市民権を獲得すべきであろう。市民権の変貌過程に関する研究は次回の課題にしておく⁴¹⁾。

参 考 文 献

- 구자정, 「소비에트연방은 왜 해체되었는가? -소련의 ‘이중해체’ 와 ‘민족창조정책’ 을 통해서 본 소련해체문제의 재고」, 『역사학보』 210 집, 2011.
- 국사편찬위, 『러시아·중앙아시아 한인의 역사(상권)』, 2008.
- 기계형, 「젠더의 시각에서 본 중앙아시아 고려인 이주: 우즈베키스탄 고려인 여성의 행위자로서의 경험과 역사적 기억을 중심으로」, 『역사학보』 212 집, 2011.
- 김계르만, 「CIS 고려인의 역사성과 정체성 (원제: 소련의 붕괴와 CIS 고려인들)」, 『세계한민족포럼 논문집』, 2009.
- 김경학, 「중앙아시아 고려인의 한국 이주와 정착: 광주 ‘고려인마을’ 을 중심으로」, 『국제지역연구』 17 권 4 호, 2014.
- 김병학 편, 『한진전집』: ebook, 인터북스, 2011.

41) この論文は、拙稿「多共和国人民から多国家市民へ ソビエト共和国連邦の解体と高麗人」(『石堂論叢』第59集, 釜山:2014)の一部を修正し、日本語翻訳したものである。

- 김병학·한야꼬브, 『재소고려인의 노래를 찾아서 2』, 화남출판사, 2007.
- 김승화, 『소련 韓族史』, 대한교과서주식회사, 1989.
- 김영술·홍인화, 「중앙아시아 고려인의 광주지역 이주와 문화변용에 관한 연구」, 『디아스포라 연구』 7 권 1 호, 2013.
- 김호준, 『유라시아 고려인 150 년』, 주류성출판사, 2013.
- 김효실, 「안산 땃골에 첫 고려인 자녀 지원센터」, 『한겨레신문』, 2014. 1. 15.
- 『독립신문』, 1922. 1. 21.
- 박명진, 「고려인 희곡 문학의 정체성과 역사성-연성용 희곡을 중심으로」, 『한국극예술연구』 제 19 집, 2004.
- 반병률, 「신한촌과 노령 한인사회」, 『근대독립운동사와 연해주 신한촌』, 해외한민족연구소 학술대회, 1999.
- _____, 「러시아 한인(고려인) 사회와 정체성의 변화-러시아 원동시기를 중심으로」, 『한국사 연구』 140, 2008.
- 법무부 출입국·외국인정책본부, 「출입국·외국인 정책 통계월보: 2014년 4월호」, 2014년 5월.
- 백태현·이애리아, 「중앙아시아 고려인의 고본질」, 『비교문화연구』 6 집 1 호, 2000.
- 서규완·이완중, 「사회주의와 민족문제-소련의 민족정책을 중심으로」, 『슬라브연구』 제 23 권 1 호, 2007.
- 스제빰 김, 「스탈린의 한인 강제이주와 잃어버린 모국어」, 『역사비평』, 1990.
- 신소영, 「고려인촌 바뀐 ‘땃골’-가게 진열 보드카만이 ‘검은 노동’ 위 로」, 『한겨레신문』, 2013. 9. 15.
- 신명직, 「가리봉을 둘러싼 탈영토화와 재영토화」, 『로컬리티 인문학』 8 호, 한국민족문화연구소, 2011.
- _____, 「재일코리안과 다국가 시민권」, 『석당논총』 56 호, 석당전통문화연구원, 2013.
- _____, 「‘다(多) 공화국 인민’ 에서 ‘다(多) 국가 시민’ 으로- 소비에트 공화국 연방의 해체와 고려인」, 『석당논총』 59 호, 석당전통문화연구원, 2014.
- 신현준, 「포스트 소비에트 공간에서 재한고려인들의 월경 이동과 과문화적 실천들」, 『귀환 혹은 순환』, 그린비, 2013.
- 심현용, 「뿌진 시대의 러시아 민족정책과 한인사회 전망」, 『아시아태평양지역연구』 3 권 1 호, 아시아태평양지역연구소, 2000.
- 양원식, 「중앙아시아 카자흐스탄 고려인들의 사회문제」, 『재외한인연구』 7-1, 1998.
- 엄지원, 「3 대째 만에 모국 왔지만, 염색공장에서 3 년 일하다 폐결핵으로」, 『한겨레신문』, 2013. 9. 15.
- 연성용, 『신들메를 즐라메며』, 예루살렘, 1993.
- 윤병석, 「소비에트 건설기의 고려인 수난과 강제이주」, 『中央史論』 21 집, 2005.
- 이경숙, 「블라디보스토크 한인학교의 변동 1905-1922」, 『정신문화연구』 제 34 권 1 호, 2011.
- 이광규, 『러시아 연해주의 한인사회』, 집문당, 1998.
- 이광수, 「그 당시의 追憶: 露領情景」, 『동광』 26 호, 1931.
- 이명재 편저, 『소련지역의 한국문학』 :ebook, 국학자료원, 2002.
- 이봄철, 「고려인 농업형태인 고본질의 변화와 시설농업의 전망」, 『전남대학교 세계한상문화연구단 국내학술회의집』 10, 2007.
- 이승하, 「카자흐스탄 고려인 시인 강태수 시세계 연구」, 『한국문학과 예술』 제 8 집, 2011.

- 이원용, 「고려인 강제이주의 원인 및 과정」, 『유럽사회문화』 Vol. 7, 2011.
- 이정선, 「김준의 『십오만원 사건』에 나타난 항일투쟁의 형상화 고찰」, 『국제한인문학연구』 5, 2008.
- 이채문, 「중앙아시아의 이산민족과 초국가주의 고려인과 아호스카 튀르크인의 비교」, 『한국동북아논총』 제 55 집, 2010.
- _____, 「재외한인의 자영업에 관한 연구 : 카자흐스탄 고려인의 사례를 중심으로」, 『한국동북아논총』 제 46 집, 2008.
- 이천영, 「귀환동포 지원법 반드시 제정돼야」, 『경기도 외국인 정책 간담회 및 지원단체 활동가 네트워크 활성화를 위한 워크숍 자료집』, 경기도 외국인 인권지원센터, 2013. 11.
- 이원용, 「1937년 고려인 강제이주의 원인 및 과정」, 『유럽사회문화』 7호, 2011.
- 이혜경 · 정기선 · 유명기 · 김민정, 「이주의 여성화와 초국가적 가족-조선족 사례를 중심으로」, 『한국사회학』 제 40 집 5호, 2006.
- 이혜경, 「혼인이주와 혼인이주 가정의 문제와 대응」, 『한국인구학』 제 28 권 제 1호, 2005.
- 전병국, 「소련의 민족 정책과 고려인 강제이주」, 『일본연구』 15 집, 2011.
- 정태수, 「망국 직후의 신한촌과 한민학교 연구」, 『한국교육사학』 13 권, 한국교육사학회, 1991.
- 조규익, 「구소련 고려시인 강태수의 작품세계」, 『대동문화연구』 76, 2011.
- 최대회, 「소비에트 민족정책과 스탈린의 민족문제 ‘해법」」, 『인문과학』 16 집, 2003.
- 한성미 · 임승빈, 「소수민족집단체류지역 (Ethnic Enclave) 으로서의 엔벤거리의 장소성 형성 요인 분석」, 『한국조경학회지』 36 (6), 2009.
- 해외문화홍보원, 「서울 속 ‘작은 러시아」」, 『코리아넷뉴스』, 문화체육관광부, 2013. 2.
- 허혜란, 「아나」, 『체로키 부족』, 실천문학, 2008.
- _____, 「내 아버지는 서울에 계십니다」, 『체로키 부족』, 실천문학, 2008.
- 홍용희, 「구소련 고려인 디아스포라 시 연구-양원식의 시세계를 중심으로」, 『한국근대문학연구』 22, 2010.
- 홍용호, 「『레닌기치』에 나타난 1938년 카자흐스탄 고려인 사회」, 『아시아문화연구』 32 집, 2013.
- _____, 「강제이주 직후 중앙아시아 고려인 사회의 스타하노프운동」, 『한국사학보』 54호, 2014.
- 황영삼, 「우즈베키스탄 고려인 경제공동체의 형성과 발전과정의 재조명- ‘북극성’ 콜호즈의 경제적 업적을 중심으로」, 『역사문화연구』 26 집, 2007.
- 和田春樹, 「ロシア領極東の朝鮮人 一八六三~一九三七」, 『社会科学研究』 第40卷第6号, 1989年. (Haruki Wada, “Koreans in the Soviet Far East, 1917-1937” Dae-sook Suh (ed.), *Koreans in the Soviet Union*, Papers of the Center for Korean Studies No.12, Honolulu: University of Hawaii, 1987.)
- Gil S. Epstein, Ira N. Gang., “Migration and Culture”, *Frontiers of Economics and Globalization Vol. 8: Migration and Culture*, Emerald: 2010. (<http://www.emeraldinsight.com/books.htm?issn=1574-8715&volume=8>)

「다(多) 국가 시민」으로서의 고려인 연구 —「다(多) 공화국 소비에트 연방 인민」으로부터의 변천

신 명 직

한국에 정주하길 희망하는 고려인들은 2007년 방문취업제 이후 급격하게 늘어났다. 최근 독립국가 연합 출신 고려인들은 대략 3만 여명에 달한다. 러시아 연해주, 중앙아시아에로의 강제이주를 거쳐, 다시 한국땅으로 들어오게 된 이들은, 이제 한국 땅에 정착해 정주할 권리와 책무를 얻길 원하고 있고, 이러한 시스템을 구축하는 일은 그 무엇보다 중요한 것임에 틀림없다.

하지만 이들 고려인들을 대상으로 동화정책을 통한 국민 만들기 프로젝트를 기획한다든가, 한국을 ‘중심’으로 관련 국가들을 ‘주변’으로 포섭해내려는 기획들은 과연 바람직한 것일까. 이글은 이와 같은 물음에 대해 답하기 위해 기획한 것이지만 그 답은 그리 간단해 보이지 않는다. 하지만 분명한 것은 국경을 끊임없이 넘나들어온 고려인들의 복잡다단한 상황을 동화/동화억제라는 2분법으로 간단히 재단해낼 수 없다는 것. 고려인에게 중심과 주변이란 고정된 것이 아니라는 것. 고려인들에게 중심은 어떤 때는 소비에트 연방이었고, 또 어떤 때는 러시아, 우즈베키스탄, 북한, 또 어떤 때는 한국이었으며, 어떤 때는 중심이 이들 중 하나가 아니라 둘 이상 일때도 있었다는 것이다.

이를 보다 엄밀히 살펴보기 위해선, 소비에트 사회주의 공화국 연방 해체 이전과 이후의 고려인들의 삶이 어떠한지, 특히 공화국 혹은 국가를 가로지르는 어떤 삶을 살아왔는지를 눈여겨 볼 필요가 있다. 소비에트 공화국 연방 시기의 고려인들이, 공화국과 공화국을 가로지르는 ‘다(多) 공화국 인민’으로 살아왔다면, 소비에트 공화국 연방 해체 이후의 고려인들은 소비에트 공화국이 아닌 이를테면 우즈베키스탄과 우크라이나 혹은 러시아 ‘국가’들을 가로지르는 ‘다(多) 국가 시민’으로 살아왔다고 할 수 있다.

물론 소비에트 공화국 연방 해체 이후도 그렇지만, 공화국 연방 시기의 고려인들의 삶 역시, 공화국 연방시기 내내 동일한 것은 아니었다. 이를테면 강제이주 이전과 이후가 다를 뿐 아니라, 스탈린 사후 후르시초프 등장 이전과 이후가 서로 다르다. 강제이주와 함께 고려인들은 거주제한을 받는 특별이주민 곧 ‘적성인민’으로 낙인 찍힐 수 밖에 없었다. 하지만 중앙아시아의 소비에트 공화국에 거주하던 고려인들은 ‘적성인민’을 벗어나 ‘소비에트 인민’이 되기 위해 부단한 노력을

기울였다. 고려인들은 제 2 차 세계대전 중에 ‘노동군’ 으로 참여한다든지, ‘사회주의 노동영웅’ 이 되기 위해 부단한 노력을 기울인 결과, 1953 년 후르시초프의 등장과 함께 당당히 소비에트 공화국의 인민이 될 수 있었다. 소비에트 공화국 연방 시기 내내 줄곧 ‘소비에트 공화국 인민’ 이었던 것은 아니지만, 고려인은 연해주와 중앙아시아 공화국을 가로지르는 ‘다(多)공화국 인민’ 이 될 수 있었다.

엄밀히 시기를 구분하자면 ‘다공화국 인민’ 이후 곧바로 ‘다국가 시민’ 이 등장한 것이 아니다. 적성인민에서 해방되어 거주이전의 자유를 획득한 고려인들은, 고려인들 특유의 소민족 공동체와 콜호즈 기반시스템을 활용한 유농(遊農)형 장거리 ‘고본질’ 농업을 하기 시작했는데, 이는 소비에트형 경제와 시장 경제를 결합한 것이었다. 장거리 고본질 농업은, 하나의 소비에트 공화국 단위에서 이루어진 것이 아니라 여러 소비에트 공화국들을 넘나들며 생산과 유통이 함께 이루어졌기 때문에 고려인들은 소비에트 공화국을 넘나들며 시장경제를 개척해가는 시민 곧 ‘다(多)공화국 시민’ 이라 명명할 수 있을 것이다.

소비에트 공화국 연방의 해체 이후에도 고려인들의 장거리 고본질은 독립국가 우즈베키스탄과 독립국가 우크라이나, 혹은 독립국가 러시아 등을 가로지르며 이루어져왔다. 때론 무국적자가 되기도 했지만, 고려인들은 그럼에도 불구하고 독립국가 연합(CIS) 안에서 독립국가들을 넘나드는 ‘다국가 시민’ 이 되어갔다. 중앙아시아 국가들의 언어, 교육, 경제 정책들이 이들이 국경을 넘게하는 하나의 요인이기도 했다. 이 과정에서 한국의 재외동포정책은 고려인들이 한국으로의 월경을 재촉하는 계기가 되기도 했다.

한국으로의 국경을 넘은 고려인들은 또다시 한국의 국경을 넘을 수도 있고, 또한 넘을 자유가 있다. 한국에서 산재로 숨을 거둔 고려인 김발로자 씨가 부모님 곁 고향땅 우즈베키스탄에 묻히길 희망했던 것처럼, 한국에 정주하길 원하던 중국 조선족들 가운데 일부가 경제적 발전가능성이 더 높은 중국으로의 역이주를 희망하는 것처럼, 고려인들은 한국이라는 영역에 국한된 존재가 아니다. 물론 이러한 이유가 고려인들의 한국에서의 성원권을 제한하는 사유가 되어선 안된다. 말 그대로 한국과 독립국가 연합 내 모든 국가에서 자유로운 사회적, 시민적, 정치적 권리와 책무를 다 할수 있는 다국가 시민권을 획득할 수 있어야만 할 것이다.